

旬集起伏

限定五百部ノ内第二五二冊

加藤楸村句集 起 伏

頒價 參百圓拾圓

昭和廿四年七月二十日 印刷  
昭和廿四年七月二十五日 發行

著 者 加 藤 楸 村

東京都中央區築地三ノ一〇懇和會館  
三陽商工社内

發行者 工 藤 吉 彌

東京都港區芝南佐久間町一ノ七  
印刷者 中 川 二 郎

東京都中央區築地三ノ一〇懇和會館  
三陽商工社内

發行所 榛 の 木 書 房

振替東京五三三四四番

句  
集  
起  
伏

（昭和二十三年一月より  
同二十四年六月まで）

序に代へて

野の起伏ただ春寒き四十年代



元旦の汽罐車とまり大きな黒

元旦の坂登りをり何かあるごとく

風の影胸もとはしり豫感はしる

没日えて雪景ふくれくるごとし



冬木の相一二變して人は去る

冬牡丹葉さむざむと思ひ充たす

甲斐山中五句

雪嶺へゆく目もどる目煙たつ

祈りに似て煙はながし雪嶺下

顎閉ぢて生涯冬の竹のごとし

寒に入る石を掴みて一樹根

寒鯉がうごき嶺々めざめたり

まつすぐに土につく雪死の刻くる

雪夜また目にうかぶもの煙草で消す

寒さやか朝の涙はあざむかず

虹消えて馬鹿らしきまで冬の鼻

息白く泣けば女體はぬくもらむ

赤旗と寒土におろす足幾千

冬の傷の血がこんこんと月に噴く

鮫  
鱒  
の  
骨  
ま  
で  
凍  
て  
て  
ぶ  
ち  
き  
ら  
る

鴟  
の  
黙もだ  
冬  
霧  
の  
壁  
も  
う  
動  
け



冬の蚯蚓の迹あざやかに死までの距離

冬牡丹あまり露骨に脚がたつ